

## 中世の歌合における批評について

峯 村 文 人

### 一

『古今和歌集』から『新古今和歌集』にいたる八代集を少しく注意深く眺める人は誰でも、堀河百首以後の勅撰集、すなはち『金葉』『詞花』『千載』『新古今』と下つて来る四つの勅撰集において、それも後の集になればなる程、百首の歌及びそれに準ずる歌が重要な位置を占めるにいたつてゐる事に氣づくであらう。それと同時に、『古今和歌集』の時代からすでに相當に重んぜられてゐた歌合の歌が、甚だ重要な存在となるにいたつてゐる事にも氣づかざるを得ないであらう。それは、和歌史にとつて、單に、百首の歌や歌合の催しが盛んになつた事のあらはれにほかならない、などといつただけで済まされる事實ではなく、歌道の主流が、百首の歌や歌合の歌によつて特色づけられるにいたつたのだ、といふ事を物語る事實であるにほかならない。さうだとすれば、『新古今和歌集』を最高峯とし、新古今的なものを軸として展開した中世の歌境の解明は、特に百首の歌や歌合の歌において、どういふ制作態度が重んぜられたか、どういふ批評意識がはたらかされたか、といつたやうな問題について、絶えず細心の注意が拂は

れつつ行はれなければならない筈であらう。今、ここに取り上げて見ようとする歌合の批評の問題についていへば、これまで、日本文藝評論史の研究の重要な一翼になつて來た歌合の研究は、主として、「幽玄」「有心」「妖艶」「あはれ」「長高し」といつたやうな文藝理念の考察に力がそがれて進められて來たのであつて、それは無論非常に大切な事で、その收穫も多大であつたが、その半面、さういふ理念が、美として具體化される場合の姿の機微、いひかへれば、歌合の歌の實作にたづさはつた作者達が常に思はざるを得なかつた表現の基本的姿態の問題のごときについて、充分な注意が拂はれない傾向があつたやうに考へられるのであるし、あるひはまた、歌合の判詞において見られる批評には、批評の對象となる作品が、歌合といふ特殊な場面に置かれたものであるために、他の場合とはおのづから異つた批評意識がはたらいた筈であるのに、さういふ歌合独自の批評のあり方のごときについては、ほとんど關心が持たれてゐなかつたやうにも考へられるのであるが、さういふ極くあたりまへといはれさうな事からの中から、實は、歌合の批評の眞の機能や、中世の和歌美を正しく理解するための大切な鍵が見いだされてくるであらう。かういふ方面の事がらは、評論史の研究としては、およそ地味な事がらに屬しよう。しかし、今日、私どもが見る事の出来る中世の歌論書といふものは、和歌の本質的方面についての考へ方や、表現の技術的方面についての考へ方などの大切な事がらをうかがひ知る事の出来るものではあるにしても、その多くは、いはば「閉ぢられた場所」に置かれた各家相傳の秘本であつたのであつて、今日の有名な作家達によつて書かれる文学論書や作法書のたぐひとは、そのの讀まれ方の、したがつて影響を與へる與へ方の趣を非常に異にしたものであつた筈である事などを考へると、歌合の批評こそは、最も身近で、その時々の実作に即した批評であり、いはば、「開かれた場所」において、美の機微に觸れつつ、時代の歌の進むべき方向を知らせたり、表現力や批評眼を鍛へさせたりする機能を最も多くそなへたものほかならなかつたのだ、といつてよい。

ところで、歌合といふものは、二首の歌をつがひ合はせて、優劣を定める、といふ事を主性格として發達した行事である。歌合の發生した時代からはずつと後の時代の歌合であるが、村上天皇の天徳四年に催されて、後世に大きい影響を與へたものとして有名な内裡歌合の御記に、「去年秋八月、殿上侍臣鬬ニ詩合ニ時、典侍命婦等相語云、男已鬬ニ文章ニ、女宜レ合ニ和歌ニ。」といふ記事が見えてゐるが、「歌を合はす」といふ事は、單に歌をつがひ合はせて鑑賞するといふのでなく、鬬詩と同じやうに、歌をたたかはす事を楽しんだのである。同じ内裡歌合の仮名日記には、「仰せごとにて、左大臣してかちまけのわざせさせ給ふ。」といふやうな記事も見えてゐるが、このやうに、「歌のかちまけのわざ」をするのが歌合にほかならなかつた。したがつて、歌合の批評は、この優劣判定の理由をあきらかにする役目を果しつつ發達したものであつて、常に、つがへられた二首のかかはり合ひから離れる事が出来ないといふ特殊な拘束を受けてゐた批評であつた。長久二年に行はれた弘徽殿女御十番歌合を見ると、十番の、戀の題の歌のつがひ、

左

伊勢たいふ

世の中にわりなきものは人知れず戀ひつつ年を積むにぞありける

右勝

あかぞめ

夢にだに見ばやと思ふに人戀ふる床にはさらに臥されざりけり

に對して、判者の大和守義忠は、

戀のうたはいづれもいづれも心をしむるすぢなれば、おとらぬころばへはべるにも、夢の床にふされぬまではべるうたは、今すこしまさりてやと見えはべれば、あはせがらにやはべらん。

といふ批評を與へてゐる。二首の歌の「あはせがら」。歌合の批評の世界は、この「あはせがら」の關係の場面のう

に立つてゐたのである。これはあまりにあたりまへの事がらであらう。しかし、このあたりまへの世界から、あたりまへの事がらとして見いだされて来る批評の基準に關する問題や「歌合の歌」といふ意識の問題などに、見すごして置く事の出来ない何かがあるやうに考へられる。

小西甚一兄は、昭和二十八年四月號の『國語と國文學』に發表せられた「中世人の美」といふ論考で、中世人の美意識について、「過去の」「微視的」「深層的」「切斷的」の四つの特性を指摘されてゐるが、「既に存在する表現」と調和し共感してゆかうとする精神の上に生れた「過去の」、「洗煉されきつた感受性のこまやかさ」によつて「かすかな新しみを味はひわけける」はたらきの上に生れた「微視的」、「既に存在する表現」との調和の世界で「共同的な深層」に深まらざるを得ないところから生れた「深層的」、「表現する心と表現される心」との對立が「切斷を媒介とする融合」を求めて「こまかい陰影をとまふ連斷的把握」を導いたところから生れた「切斷的」、といったやうな性格の、どれ一つを取り上げて見ても、それを中世人の共有の美として深めさせるといふ最も重要なはたらきをつとめた場所としては、歌合の批評的世界を、まづ指摘しなければなるまい。すぐれた歌の境地を語つて、『古來風體抄』には「歌はただ、よみあげもし、詠じもしたるに、何となく艶にもあはれにもきこゆる事のあるるべし。もとより詠歌といひて、こゑにつきて、よくもあしくもきこゆるものなり。」といひ、『毎月抄』には「其の歌はまづ、心ふかく、たけたかく、たくみにことばの外まであまれるやうにて、姿けだかく、詞なべてつづけがたきが、しかもやすらかにきこゆるやうにておもしろく、かすかなる景趣たちそひて、面影ただならず、けしきはさるから心もそぞろかぬ歌にて侍り。」といつてゐる。この二つの言葉には、無論、この二つの言葉を生んだ、二人の中世歌人の、それぞれ異つた素質や美意識がきびしくはたらいてゐる。しかし、この二つの言葉のいづれも、實は、もう一人の歌人の『詠歌一體』に、作歌の實際の心得の一つとして「歌のすがたの事」を語つて、「詞なだらかにいひく

だし、きよげなるはすがたのよきなり。おなじ風情なれど、わろくつづけつれば、あはれよかりぬべき材木を、あた  
ら事かなと難ぜらるるなり。されば案ぜんをり、上句を下になし、下句を上になしてことがらを見るべし。上手とい  
ふはおなじ事をきよくつづけなすなり。ききにくき事はただ一字二字も耳にたちて、卅一字ながらけがる也。まし  
て一句わろからんは、よき句まじりても、更々詮あるべからず。」などといつてゐる言葉を支へてゐる和歌傳統とま  
つたく同じ流れの上に載つてゐたものであつて、それは、たがひの歌を發表し合ひ、たがひの歌の美を享受し合ひ、  
しかも、たがひの歌を見る眼を鍛へ合ふ「共通の場」として、「晴の場所」として發展した歌合の歴史が生れさせた  
言葉にほかならなかつたのだといつてさしつかへがないであらう。この事は、『詠歌一體』の「歌も折によりてよむ  
べき様あるべき事」といふ條に、次のやうにいづてゐる事からだけでも、うかがはれる筈である。すこし長くなるが  
全文を掲げて見よう。

百首をよまんには、地歌とて、所々には、さる體なるものの、いひしりたるさまなるをよみて、其の中に透逸出  
で來ぬべき題をよくよく案すべし。さのみ心をくだく事も、其の詮あるべからず。よき歌のいでくる事も自然の  
事なれば、百首などにかすかすに沈思する事はせぬ也。三十首二十首などは、歌ごとによくよみて、地歌まじる  
べからず。作者の身にとりては能々沈思すべし。

歌合の歌は、ことに失錯なく、人の難じつべからん事をかねて能々みるべし。たけもあり、物にもうつ（とカ）  
ましからんすがたをよむべし。これをはれの歌と申すめり。

山ざくらさきそめしより久かたの雲井に見ゆるたきのしら絲  
見わたせば波のしがらみかけてけり卯の花さける玉川のさと  
あすもこん野地の玉川はぎこえて色なる波に月やどりけり

雪ふればみねのまさか木うづもれて月にみがけるあまのかぐ山  
四季の歌はかやうのすがたによむべきにや。

戀の歌は、天徳歌合に、

しのぶれど色に出にけりわが戀は物やおもふと人のとふまで

新宮歌合に、

うらみわびまたじ今はの身なれどもおもひなれにし夕ぐれの空

これらの秀歌にて褒美せられたり。

歌合の歌に、

ほととぎすきなかぬよひのしるからばぬる夜もひとよあらましものを

此の歌は百首の地歌とこそきこゆれ。歌合にいだすべきものにあらず。又、よひも夜も同じなるよし、判者これを難じけれど、歌はあしからぬにや、後拾遺に入りたり。かやうの事を心えて詠むべし。

右に述べられてゐるところによれば、百首の歌のやうな場合には、すべての歌にさう苦勞する事はないのであつて、所々には、「地歌」といつて、缺點はあつても、しかるべき體で、ひととほり、いひとめ得てゐる程度の歌を詠み、さういふ中に、時々秀逸とされるやうなよい作を詠み出すやうに心得て置くのであり、それに對して、三十首の歌だとか二十首の歌だとかいふ場合には、一首々々苦心して詠むべきで、その中には地歌などがまじらないやうに心得て置くのであり、さらに、歌合の歌は、一首々々、「晴の歌」といつて、殊に缺點がなく、のびのびとしてゐて、しかも、垢ぬけのした體であるやうに心得てゐなければならぬ、といふ。さうだとすれば、「歌合の歌」のあるべき眞の姿は、百首の歌だとか三十首の歌だとか二十首の歌だとかいつた歌の中の秀逸と重なるべきものであらう。これ

は、「歌合の歌」においては、常に時代の歌の典型的完全性をそなへてゐる事が求められてゐたといふ事でなければなるまい。右の『詠歌一體』の文に引用せられてゐる歌のうち、戀の歌の「しのぶれど」の一首は、天徳歌合で、忠見の作「戀すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」と番へられて勝とされた兼盛の作で、二首とも、「優」であると評せられて、しかも『拾遺和歌集』に入れられてゐるし、「うらみわび」の一首は、新宮撰歌合で、丹後の作「忘れじの言の葉いかにぬらむ頼めし暮は秋風ぞ吹く」と番へられて持とされた寂蓮の作で、この二首も「ともに心優」であると評せられて、しかも『新古今和歌集』に入れられてゐるが、時代をへだてたこれら二つの歌合の歌が、いづれの場合においても、それぞれの時代の「歌合の歌」としてほぼ完成された形に近いものであり、かつ、それぞれの時代の勅撰集の代表的作品といふべきものである事は注目せられてよい事であらうと考へられるのである。

## 二

歌合の批評の世界は、二首の歌の「あはせがら」の關係の場面の土に立つてゐた。これは、同じ歌に對する美的判斷や價值判斷の基準が、「あはせがら」のいかんによつて相當に影響を與へられざるを得なかつたといふ事である。

鳴く蟬の羽に置く露に秋かけて木かげ涼しき夕暮の聲（良經作）

俊成は、この歌を、六百番歌合で、

はにおく露に秋かけてなどいへる、姿詞殊に艶にをかしく侍る哉。（蟬、三十番、左）

と評して勝とし、後京極自歌合では、

羽におく露に秋かけてといへる心、ことに艶に聞えて、云々（二十四番、右）

中世の歌合における批評について

と評して持としてゐる。この場合は、「あはせがら」によつて、一方では勝とされ、一方では持とされてゐるといふ違ひがあり、また、一方は「心」の方面から見、一方は「心」の形象化された「姿詞」の方面から見てゐる違ひはあるが、同一作品に對する美的判斷が二つの歌合でほとんど異なるところのない場合であり、いづれにおいても、「殊に艶」だと判斷されてゐるのである。

ただ頼めたとへば人のいつはりを重ねてこそはまたも怨みめ（慈圓作）

俊成は、この歌を、六百番歌合で、

たとへば人の偽をといへる姿、猶深く聞え侍り。（契戀、十一番、右）

と評して勝とし、慈鎮和尚自歌合では、

心深くきこえ侍る云々（客人、十番、右）

と評して負としてゐる。俊成は、一方で「姿深き美」を捉へ、一方では「心深き美」を捉へてゐるが、「姿」は「心」の形象化されたものであつた筈なのだから、これも、同じ美を、一方は「姿」において、一方は「心」において捉へてゐるにほかならないのである。

同じ批評者が同じ歌に對して行ふ美的判斷である場合に、右のやうな批評的事實が見いだされる事は、ごくあたりまへの事のやうにいへるであらう。しかし、歌合の批評の事實は、あくまで、「あはせがら」の關係の場に立つてゐるところから、次に取り上げて見るいくつかの例が示すやうに、浮動する事の方が、むしろ、あたりまへであつたのである。

見し人の寝くたれ髪の面影に涙かきやる小夜の手枕（良經作）

この作は、六百番歌合（夜戀、三十番、左）では、慈圓の作「見せばやな夜床につもる塵をのみあらましごとしに拂ふ

けしきを」(右)とつがへられ、俊成は、

左の小夜の手枕、右の夜床の塵、共に優には待るに取りても、猶、涙かきやる小夜の手枕、殊に艶に聞え侍り。左の勝と申すべくや。

と評し、後京極自歌合(七十番、左)では、同じ良經の作「袖の波胸のけぶりは誰も見よ君がうき名の立つぞ悲しき」(右)とつがへられて、俊成は、

涙かきやるさ夜の手枕、殊に艶にみえ侍り。まさると申すべきや。

と評してゐる。ここに注目されるのは、一方で「優」と「艶」とが取りあげられてゐるのに、一方では「艶」だけが取り上げられてゐる、といふ點であらう。これは、六百番歌合の場合には、つがへられた二首の作がともにそなへてゐる「優」の美がとりわけ目立つてゐたために、「共に優」といふ評がまづ與へられ、しかも、「見し人の」の作がそなへてゐる「艶」が殊に強く感じられたために、「涙かきやる小夜の手枕殊に艶」といつた評が加へられたのだといへるやうに思はれるのであり、後京極自歌合の場合では、つがへられた二首がともに、直ちに色濃い「艶」の美を感じさせる歌であつて、特に、この「見し人の」作の方が一層「艶」の美のすぐれたものと認められたために、この番に對する批評としては、「涙かきやる小夜の手枕、殊に艶にみえ侍り。まさると申すべきや。」といつただけで、これ以上に言を用ひる必要がなかつたのだといへるやうに思はれる。

特に興味深い例を一つ取り上げて見よう。

六百番歌合の殘春三十番のつがひは、

吉野山花の古郷跡絶えてむなしき枝に春風ぞ吹く(良經作、左)

山の端に匂ひし花の雲消えて春の日數は有明の月(慈圓作、右)

中世の歌合における批評について

で、判定は持であり、俊成の評に、次のやうに述べられてゐる。

左歌、むなしき枝に春かぜぞ吹くと侍るこそ、吉野山などは古りにたる事と覺え侍るものを、いづれの峯のおくにかやうの詞の花残りけんと、なほこの道は盡すまじき事にこそ侍るめれ。苺こいもの袖もいとどしをれまさりて覺え侍るに、又、右歌、春の日かすは有明の月と侍るこそ、老の心の、曉の空にあくがれはてて、いづかたをまさるとも分きがたぐまかりなり侍りぬれ。ふるくも、春の歌などかやうに身をせむるやうなるすがた心は有りがたく侍るものと、まことに苺の袂、左右にしをれ果ててなん覺えける。

左右兩方の歌に對するこの全身的とでもいふべき深い共感と讚歎には、良經と慈圓といふ大立物の組合せに對する儀禮的な誇張も加はつてゐなかつたとはいひ切れないが、しかし、俊成といふ歌人の見解としては、私どもにごく自然な感じで受け取られるのであつて、私は、俊成の評がかういふ酔つてゐるやうな言葉になつて發せられた原因を、同じやうなあはれさの感で俊成に迫るものを持つてゐた二首の歌の「あはせがら」に求めたい。ところで、この二首の歌のうち、良經作の「吉野山」の歌の方は、後京極自歌合（十六番、左）で、「高砂の尾の上の花に春暮れて残りし松のまがひゆくかな」（右）とつがへられて、同じ俊成によつて、

左の、残る春、むなしき枝に春風、心ぼそくも侍るを、右の、残りし松のまがひ行くらむ心、なほ勝りて覺え侍るにや。

と評され、負といふ判定を與へられてゐるのであり、慈圓作の「山の端に」の歌の方は、慈鎮和尚自歌合（十禪師、四番、左）で「紅に霞の袖もなりにけり春のわかれのくれがたの空」（右）とつがへられて、同じ俊成によつて、くれがたの空、かすみ色ふかき、ことに艶に侍るべし。仍以右爲勝。

と評され、これもまた、負といふ判定を與へられてゐるのである。六百番歌合の批評にあらはれてゐた深い共感と讚

歎は、後京極自歌合や慈鎮和尚自歌合ではまつたく影をひそめてしまつてゐる事は甚だ興味深いものがあるが、なほ、さういふ風な變移の中にあつて、「吉野山」の歌に對する後京極自歌合の「心ぼそくも侍る」といふ評はいいとして、「山の端に」の歌について慈鎮和尚自歌合において行はれた美的判斷は「紅に」の歌の持つてゐる「ことに艶」と評されたやうな「艶」の美に影響されて、やはり「艶」の美の面から行はれてゐたと考へられるのであつて、ここにも、歌合の批評の性格を物語る見のがせない事實が認められるのである。

いつも聞くものとや人の思ふらむこぬ夕暮の秋風の聲（良經作）

この歌が、六百番歌合（寄風戀、十六番、左）で、慈圓の作「心あらば吹かすもあらなむ宵々に人待つ宿の庭の松風」（石）とつがへられ、俊成は、

こぬ夕暮、何のこぬとも聞えずや、秋風の聲もことあたらしくや。

といただけない歌だといふ意味の評を下して負としてゐるのに、後京極自歌合（六十九番 右）では、「うつろひし心の花に春暮れて人も梢に秋風ぞ吹く」（左）とつがへられて、同じ俊成が、

此のつがひ、又、心の花のといひ、ものとや人のなどいへる心、おのおのえんにして、勝劣又難分。仍持とすべし。

と評し、むしろ「艶」の美のある歌として支持してゐる語氣がうかがはれるが、これなども、前の例とやや似たところの見られる例とすべきであらう。

同じ俊成の批評の場合の例として、最後に、もう一つの注目すべき例を取り上げて置かう。

忘れじの契りを頼む別れかな空行く月の末をかぞへて（良經作）

この作は、六百番歌合（別戀、三十番、左）では、家隆の作「風吹かば嶺に別れむ雲をだにありし名残のかたみと

も見よ」(右)とつがへられて、俊成の評に、

左歌は、空行く月に末をかぞへ、右歌は嶺に別るる雲をかたみとせり。兩首の姿詞、共に優に侍るを、右は、雲をだにといへるや、末に叶はぬ様に侍らん。左、忘れじのと置けるより首尾相應せるにや。仍りて、以左爲勝。

とあり、後京極自歌合(七十三番、左)では、「浮舟のたよりも知らぬ浪路にもみし面影のたたぬ日ぞなき」とつがへられて、同じ俊成の評に、

此の番、勝劣分きがたく見え侍り。大方は申すも恐れ侍れども、歌は、よそへ、それよりえんなる所の名など侍らねど、左のわすれじのといひ、右は、たよりもしらぬ浪路にもなんどいへる姿詞づかひ、何となくえんにも優にもきこえ侍るを、世の人は心えず侍るなるべし。いづかたも、おとると申しがたし。持とすべし。

とある。六百番歌合の場合には、兩者ともにそなへてゐる美である「優」が捉へられて、それが、特に、左の作の空行く月に末を數へるところ、右の作の嶺に別るる雲をかたみとしてゐるところに、それぞれ見られる事が指摘され、なほ、更に、右の作の「雲をだに」の句が結句に充分に叶つてゐないといふ點に向けられた批評眼が、左の作に轉じては、首尾相應した點を指摘するにいたつてゐるのであるが、後京極自歌合の場合には、左右いづれも、劣らぬすぐれた作で、ともに、俊成の最高理想に近い「何となく艶にも優にもきこえる」作であつたために、つがへられた二つの作の美が指摘されるに當つても、六百番歌合の場合に指摘された「優」の美よりも更に高く、かつ、微妙な美である「何となく艶にも優にもきこえる」美が指摘され、しかも、それは、左の作の「忘れじの」といつたあたりや、右の作の「たよりも知らぬ浪路にも」といつたあたりに特に深くもとづいてゐる美である事が指摘されてゐるのである。そして、なほ興味があるのは、後京極自歌合の方に「何となくえんにも優にもきこえ侍るを、世の人は心えず侍

ゐるべし。」といった嘆聲が洩らされてゐる事である。かういふ風な、深い美を感じ取る享受力の乏しい一般歌人に對する嘆聲のやうなものまでも、つがへられた作のいかんから、いひかへれば、「あはせがら」のいかんから影響を與へられる事があつたわけである。

歌合の批評では、同一作品に對する美的判斷や價值判斷が、つがへられた歌のあり方に應じて、どういふ風に浮動するものであつたかといふ事を、以上の諸例でほぼうかがふ事が出来るであらう。ここに取り上げた例は、すべて、同じ俊成の判によつて行はれた歌合の場合であるが、かういふ風に、同じ批評者によつて、同じ歌が批評される場合にも、歌合といふ「あはせがら」の關係の場面が變移する事は、批評者の批評的基盤を甚だ大きく動かす事とならざるを得ないのである。

歌合といふ批評の場については、しかし、もう少しいひ添へて見たい事がある。

元永元年に催された内大臣家歌合は、俊頼と基俊との二人の判者が判を下した歌合であつて、今、そのいづれの判詞も遺されてゐるが、ここにその中の例二つを取り出して見よう。殘菊、七番、

霜枯の菊なかりせばいとどしく冬の籬やさびしからまし（左、定信作。基俊、勝と判じた）

霜枯るるはじめを見ずば白菊のうつろふ色を惜しまざらまし（右、雅光作。俊頼、勝と判じた）

俊云、（中略）後の歌は、同じ程の歌なれど、今少したましひある心地す。

基云、左右同じけれど、冬の籬さびしく侍らんといへり。さもやと見え給ふる。

二首の歌について、俊頼・基俊ともに歌がらは「同じ程度だ」といふ一應の評価を下してゐながら、俊頼は詩的表現に「感」がとほつてゐる右の歌を勝とし、基俊は「情」のこまかさの見られる左の歌を勝としてゐるのである。

戀、十一番、

逢ふ事をその年月と契らねば命や戀のかぎりなるらむ（左、重基作。俊頼、勝と判じ、基俊、持と判じた）  
よとともに燃えこそ渡れわが戀は富士の高嶺の煙ならねど（右、俊隆作）

俊云、前の歌、あしくも見えず。次の歌、ことのほかに古めかし。仍て、前の歌勝たるべし。

基云、逢ふ事をそのとし年と契らで、命をこひの限りにて侍らんこそ、あはれ心苦しく侍るに、又よとともに  
もえ渡らん人もいとほし。されば劣りても侍らず。ひとしくぞ侍る。

基俊は、二首の歌を同等に評價し、しかも、二首に對して積極的に共感してゐる。しかるに、俊頼は、勝を與へた左の歌をすら、「あしくも見えず」といつた甚だ消極的な語氣をもつて評し、右の歌には、「ことのほか古めかしい」といふ甚だかんばしくない評を下してゐるのである。この場合、基俊にとつては、新しさとか古さとかにかかはりなく、「情」の深さに價值が認められたのであり、俊頼にとつては、「情」の形象化における新しさに價值が認められたのだ、といふ事になるであらうか。ここに取り出して見た二つの例は、どうやら、同じ和歌傳統の世界に生きながら、俊頼は革新的であり、基俊は保守的であつたといふ歌人的性格の差異に結びついた批評が、どんな姿であらはれるかといふ事の一端を示してゐるもののやうであるが、かういふまたく同じ歌のつがひといふ批評の場に立ちながら、批評者が異なる事によつて、甚だ異つた判斷が行はれるといふ事は、文藝の世界にあつて、あまりにあたりまへの事がらだといふべきであらう。しかし、私がいつて見たい事は、資質的に、あるひは經驗的もしくは教養的に、いろいろな違ひを持つた多くの歌人達が、ここに俊頼と基俊とが示してくれてゐるやうなそれぞれ獨自の世界を持つてゐて、同じ歌合の「場」にのぞみ、判者を中心として、作者であると同時に、あるひは享受者となり、あるひは批評者となつて、時代の歌をおし進めていつてゐたのだ、といふ事なのである。

かういふ「場」にあつて、つがひ合はされた歌の、「心」や「姿」の機微に觸れ、價值を見定める「眼」が鍛へら

れる。——かういふ歌合独自の批評的世界のあり方を見据ゑてゐると、その先に中世美のあり方が見えて来るであらう。だから、歌合における批評の特殊的機能は、たしかに、中世の美を正しく理解するための大切な鍵の一つにほかならない、と考へられるのである。

### 三

歌合の判詞を見てゐると、「歌合の歌」といふ言葉がしばしばあらはれて来る。それは、無論、判者達の批評意識の中に、「歌合の歌」のあるべき姿はどういふものかといふ意識がかなり強くはたらいてゐた事をあらはしてゐる筈である。さういふ場合のうち、特に「歌合の歌」がそなへてゐなければならぬ條件に對する考へが相當にはつきりしてゐる例を整理して見たら、どういふ風になるであらうか。清輔の判詞の中に、「歌合の歌はよみやうあり。」（平經盛朝臣家歌合）といふ言葉が見えてゐるが、歌合の判詞にあらはれて来る「歌合の歌」の詠みやうの意識からうかがはれるものは、先に取り上げて見た『詠歌一體』の考へにどういふ風に結びついてゆくのであらうか。

第一に指摘される事は、歌合の歌は、「あはせがら」の關係の場面ではたらく歌合独自の批評のこまかさ<sup>なみだ</sup>に堪へる事が目指されなければならなかつた、といふ事である。ただ、この條件は、實際には、第二以下にあげるすべての條件にかかはるものである事はいふまでもない。

#### 御室撰歌合、五十五番、

先だてし心もはてはあしびきの山のあなたに消ゆる白雲（左、家隆作）

しばしだにうれしき袖につつまばや憂きに落つるもおなじ涙を（右、顯昭作、勝）

各<sup>各々</sup>左右之雌雄いかにと尋ね申し侍りしかば、何れもいとをかしくいひしりて、優美なり、と感じ申されしか

中世の歌合における批評について

ば、愚老申してき。さのみ迷<sub>ニ</sub>是非之理勝負之定<sub>一</sub>、後見もけしからずこそ。此のつがひ、いかにも、毛を吹き、て疵をもとめ出で侍らんと申侍りしかば、尤もしかるべし、と仰せ侍りしかば、左は、いひしれる姿、いとやさしく侍れども、右も、とがなく優美なり。さりながら、左、山家に心をおもひ入れて侍るはよしあるさまなるを、やがて心のはりせり。右は、一筋にうきを歎きて、同じ姿を、うれしなきのなみだもるさま、をかしく思はれたるは、山のあなたに入りてころがはりせるよりも、今すこし切にこそ侍らめ、と申し侍りしかば、げにもよく毛を吹きまはしてもとめ出でたり、と仰せ有りしかば、以<sub>レ</sub>右爲<sub>レ</sub>勝。

判詞は俊成が書いたものである。いづれの歌も、大層おもしろくいひあらはし得て、優美だ、と感歎されたもので、勝負の差をつけにくい程の作であるにかかはらず、左の歌から、強ひて、極くわづかな缺點を見つけ出し、右の歌の「今すこし切」であるに勝を與へてゐるのである。さういふ風にしまで缺點を探す事を「毛を吹いて疵を求め」とか「吹毛」とかいふわけであるが、それは、歌合においては、單なる「あら探し」ではなくして、批評や鑑賞や作歌の上で、美の微妙を見分け美の機微を捉へる「眼」を深く鋭く鍛へさせることとなつたのであり、同時に、さういふ「眼」の深さや鋭さに堪へる歌を求めさせることとなつたわけである。「歌合の歌」といふ言葉を用ひて、かういふ事に觸れてゐる例を少しく示して見よう。

澄みのぼる月しやどれば難波瀉みちくる汐もつららぬにけり（中宮亮重家朝臣家歌合、資隆作、月、十番、左、持）

難とすべき所なく、歌合の歌とみえたり。（俊成判）

ねざめしてもものぞ悲しき昔見し人はこの世にあるぞ少き（廣田社歌合、寂念作、述懷、十三番、右、負）

姿さびて心ぼそく、げにさる事なりと聞え侍るを、ものぞ悲しきとおき、あるぞ少きといへる「ぞ」の字、

「き」の字、同じさまにぞ聞え侍る。歌合にはさるべき事なるべし。(俊成判)

時ぞとや夜半の螢をながむらむとへかし人のしたのおもひを(水無瀬殿戀十五首歌合、家隆作、春戀、九番、右、負)。

句のはじめのとの字、ふるき難には侍らねど、歌合には、只なるよりは耳にたつやうに侍る上に、云々(俊成判)

西行の自歌合である宮河歌合のやうな、もともと歌合の歌として作られたものでない歌によつて行はれた場合でさへ、一たん歌が「歌合」といふ批評の場に置かれた時、判者に「毛を吹いて疵を求める」といつた批評意識がはたらかざるを得なかつた事は次に示す例のとほりであつた。

山櫻かしらの花に折りそへて限りの春の家づとにせむ(七番、左)

花よりも命をぞなほ惜しむべき待ちつくべしと思ひやはせし(右、勝)

左の、限りの春のといひ、右の、命をぞなほといへる、何れも哀れふかくは侍るを、かしらはなにとおける、此の歌にとりては、さこそとはみゆれど、雪霜などは、つねにききなれたることなるを、花といへるも有ることにはあれど、いかがと聞え侍るにや。大方は歌合のために、よみあつめられたるに侍らねば、かやうのことは、しひて申すべきにあらねど、右のうた、耳にたつ所なきにつきて、勝と申すべし。(定家判)

第二に指摘される事は、歌合の歌は、題が、「心」の上には無論の事、「詞」の上にも、正しく詠み取られてゐなければならなかつた、といふ事である。新古今時代に、五十首の歌によつて行はれた「老若五十首歌合」だとか、百首の歌によつて行はれた「千五百番歌合」だとかいつたやうな、特殊な歌合もあつたけれども、歌合の歌は大方題詠であつたところから、當然、かういふ事がらが、非常に大切な事がらとして、批評意識に映らざるを得なかつたわけ

である。

思ひやれ庭の木の葉を踏み分けてとふ人もなき宿のさびしさ（右大臣家歌合、行頼作、落葉、五番、右、持）

すがた心ともにあしくもはべらねど、もみぢはそばの事にて、ただ淋しきことをのみのべられたれば、歌合な

どにはいかが云々（清輔判）

日をへつつしぐるるままに立田山松のみどりの残り行くかな（右大臣家歌合、俊惠作、紅葉、十二番、左、持）

心有りては見え侍り。時雨るるままに立田山といへるに、紅葉定めてあるらんとはおしはかられ侍れど、詞に

紅葉の侍らぬこそ、歌合にはいかがと覚え侍れ。（俊成判）

名に高き姨捨山の月影も秋はことにぞ照りまさりける（中宮亮重家朝臣家歌合、右京大夫作、月、四番、右、持）

姨捨山の月も秋なりといへる、猶詠月歌、已當「正理」。ことにめづらしきところなけれど、歌合の歌とみえたり。（俊成判）

中世の歌人達が題をたしかに詠み取る事を重んじたといふのは、題の本意をたしかに詠み取る事を重んじたといふ事にほかならなかつた。そして、歌合の歌においては、何よりもまづ、把握の「眼」が、特に本意に向つて据ゑられてゐなければならなかつたのであつて、さういふ條件になつた歌は、やはり、「歌合の歌とみえ」たのである。顯昭は、若宮社歌合に「折にかなひたる風情と歌合とは似ぬ事にや侍らむ」（山居聞鶯、五番の判詞）といつてゐるが、かういふ言葉なども、歌合の歌は題の本意が大切である事にいひ及んだものであつた。

第三に指摘される事は、歌合の歌は、『古今和歌集』以来の和歌における趣向や用語の傳統の上にしっかりと立つてゐなければならなかつたといふ事である。

紫ににほふ藤浪うちはへて松にぞ千代の色はかかれる（天徳四年内裡歌合、朝忠作、藤、九番、左、負）

水なくて藤浪といふことは、ふるきうたにをりをりあり。されども、尋ぬる人なければ、とどまれるなるべし。歌合にはいかがあらん。ことによせぬはあるまじ。いはれなし。猶水池岸などぞよすべかりける。歌がらはきよげなり。(實頼判)

きく人の袖もぬれけり秋の野の露わけてなく小男鹿の聲(平經盛朝臣家歌合、公重作、鹿、五番、左、勝)

鹿のねはあはれとはうちきくも、袖ぬるるまではいかがなるべくも、かくよめる歌こそおぼえね。このさきに申しつる俊頼の歌こそ、涙とよまれて侍るめれど、歌合などには、猶跡なきことはいかが。おほかた歌めきて侍るめり。(清輔判)

かつて先人によつて詠まれた歌にたびたび見られるものであつても、それが傳統となり得なかつたやうないひあらはし方、いひかへれば、どこかで斷ち切られて傳統の流れから疎外されてしまつたやうな表現だとか、最初から傳統の流れから逸脱してゐたやうな趣向、いひかへれば、傳統に對する異端的な趣向だとかは、きびしくしりぞけられなければならなかつた。さういふ風な道に立ちながら、しかも、めづらしさや新しさを求めて歩んだのが中世歌人達であつた。新古今時代に榮えた作歌手法に「本歌取」といふのがある。これは、ある獨立した古歌の世界を髣髴たらしめるやうにして、そのはたらきを生かした何らか新しい世界を形成するといふ重層的表現とでもいふべき手法であつて、傳統の上に右のやうな生き方をした中世歌人達であつて、はじめて、最も大きな表現効果をあげる事が出来るといふ性質のものであつたのである。

以上の三つは、歌合の歌の、およそ備へなければならぬ基本的な條件といへるものであらうと考へられる。しかし、歌は詩であり、言葉の藝術でなければならぬ。したがつて、當然、「歌合の歌」といふ意識によつて詩的本質に觸れた問題として、次に取り上げるやうな事がらが照らし出されて来る。そこで、

第四に指摘される事は、歌合の歌は、表現されたものの上に「感」がとほつてゐなければならなかつた、といふ事である。「感」がとほつて言葉がきいてゐる時、詩情はいきいきと光り出して來るのである。

戀しさにおもひよそへて女郎花折るわが袖ぞいとど露けき（西宮歌合、前大貳作、女郎花、十一番、左、勝）

左の、をる我が袖ぞいとど露けきといへる、詞づかひなどしたたかにて、歌合のうたはかうやうにこそは、とをかくみえ侍り。（基俊判）

若宮社歌合、松間梅花、十一番、

消えのこる雪かとのみぞみ山べの松にまじれる梅のはつ花（左、是忠作）

梅が香を緑の枝にうつしもて我がものがほに匂ふ松風（右、仲頼作、勝）

左歌、末の、松にまじれる梅のはつはなとおかれたるはよろしきに、雪かとのみぞみ山べのと續けられたるは、見ゆるといふ心にや。古くかかるためしなきにはあらねど、歌合などには猶事淺くや。右歌、今少ししたしかにや聞え侍らむ。緑の枝にうつしもてわがもの顔になど侍る、見所ある心地つかうまつれば以て右爲勝。

（顯昭判）

庭火たくあたりをぬるみ置く霜のとけぬや月の光なるらむ（住吉社歌合、實房作、社頭月、三番、左、勝）

こころめづらしく、ことばいひしれりとみゆ。（中略）とけぬや月のなどいへるすがた、歌合のうたと見え侍れば、以て左爲勝。（俊成判）

民部卿家歌合、初郭公、十八番、

思ひねの夢にはなれき時鳥うつつはこれぞはつ音なりけり（左、保季作、持）

深山邊の家ゐならずば郭公人より先にいかできかまし（右、實宣作）

左歌、姿心をかしくは侍るを、夢にはなれきといへるや、そで打ちかはしなどやうにやききなされ侍らん。右歌、ことなくはいひくだして、歌合にはまさるとも申すべく侍れど、左、尙現（うつつ）はこれぞなどいへる、ちからいるやうに聞え侍れば、持と申すべくや。（俊成判）

千五百番歌合、卷第十八、千三百一番、

うしと思ひ（ふい）戀しと思ひ（ふい）一かたに（もい）かはく時なき袖のうへかな（左、有家作、勝）  
めのまへにかはるものぞとみてもなほよの契りのはてぞ忘れぬ（右、俊成女）

左歌は、風情たくみに露詞あざやかに侍り。右歌は、こん世にもはやなりなんめの前につれなき人をむかしと思はん、といふ歌の心をば思はれたれど、末句たしかにも聞えず。歌合の歌には、左やまさり侍らん。（顯昭判）

右に示したいろいろの例から、次のやうな言葉によつて指摘されるものが、歌合の歌においてそなへられなければならない共通点であつた事が知られるであらう。それは、「言葉づかひなどしたたかである」「たしかに聞える」「力がこもつてゐるやうに聞える」「歌らしくひき立つやうないひ方になり得てゐる」「表現があざやかである」といつたやうなところになるやうである。これらは、何らかの意味で「感」がきいた表現になつてゐるといふ事であり、したがつて、把握のはたらきに「感」がきいてゐるといふ事にほかならない。かういふ方面から見ても、歌合の歌として、しりぞけられなければならない、とされたのは次の例にうかがはれるやうな点であつた事も自然であらう。

霜枯に移ろひ残る村菊はみる朝ごとめづらしきかな（内大臣家歌合、俊隆作、殘菊、十二番、左、負）

無三指事。むらぎく、をさなげなり。（俊頼判）

此の歌させる難はみえねど、歌合のうたとはみえず。なげ歌のやうにぞ侍るめる。（基俊判）  
月日をば心きよくてすぐせども涙の落つる事ぞわりなき（廿二番歌合、定宗作、長精進戀、三番、左、勝）

むげにただごとなれど、歌合にはかつ事も侍りなん。(顯昭判)

春毎にあかぬ櫻の花ゆゑに吉野の山を住家とぞする(民部卿家歌合、有經作、山花、十五番、右、負)

歌合の歌とはみえながら、又やすらかにや侍らん。(俊成判)

俊頼が「をさなげだ」といつた歌を基俊は「なげ歌のやうだ」といつて、二人ともいけないとしてゐる。顯昭は「まつたくだごと歌だが、歌合では勝つ事もあらう。」といつて、「ただごと」は取れない事に觸れてゐる。また、俊成は「歌合の歌とは見えるが、安易な詠みぶりのやうで、賛成出来ない。」といつてゐる。いづれも、詠まうとするに對象に對する「感」の弛緩をいけないとしてしりぞけてゐるのだ、といへるのである。

第五に指摘される事は、歌合の歌のあるべき姿は、「優」の美によつて統一されてゐなければならなかつた、といふ事である。

萬葉集などの歌、殊に優なる事を歌合にはとり出づべき事とこそふるくも申して侍るめれ。(右大臣家歌合雪、十六番、俊成の判詞)

萬葉集より出でたりとも、歌合の時は左右なく證據とすべしとも覺え侍らず。萬葉集は優なる事をとるべきなりとぞ、故人も申し侍りし。是、彼の集聞きにくき歌も多かる故也。(六百番歌合、元日宴、五番、俊成の判詞)

右の二つの判詞を書いたと同じ俊成が、千五百番歌合判詞では、「大方は萬葉集にもをかしきやうなる事を取り詠する也とぞ、古き物にも申し侍る。」(卷第四、二百四十六番)ともいつてゐるが、これも、前の二つの場合に引かれたのと同じ古人の言葉を、「優」の代りに「をかし」を置き換へて、いつてゐる事はあきらかである。ところで、歌合の歌に『萬葉集』の歌などから取つて來る場合は「優」であるものを選ばなければならないといふ事は、『萬葉集』には「優」でないものが多いといふ事を意味し、歌合の歌は「優」でなければならぬといふ事を意味してゐる。

にほかならないであらう。では、「優」とは何か。「優」は、本來、「ゆたかさ」「寛裕」や「やはらかさ」(柔和)の意味を持つてゐる。さうしてみると、「優」は、萬葉時代には基調となつてはゐなかつた美、いひかへれば、古今時代以來の平安時代的な傳統の上に立ち、何らかの姿で、「ゆたかさ」とか「やはらかさ」とかいつたものを性格としてあらはれる「雅」の美とでもいふべきものにほかならなかつたであらう。「優」の持つさういふ性格を歌のあり方に即して見るとすれば、恐らく、次に示す諸例の語つてくれるものが、それに近いのではなからうかと考へられるのである。

淋しさは冬にかはらぬ山里にはるめくものはうぐひすの聲(若宮社歌合 伊綱作、山居聞鶯、七番、左、持)

ここはと見ゆる所もなく、なびやかにて、歌合の振舞によまれて侍るめり。(顯昭判)

深山邊の家ゐならずば郭公人より先にいかできかまし(民部卿家歌合、實宣作、初郭公、十八番、右、持)

ことなくはいひくだして、歌合にはまさると申すべく侍れど云々(俊成判)

逢はでのみ過ぎぬ程の久しさに思ひくらべてまつ暮もがな(民部卿家歌合、季能作、久戀、七番、左、持)

させる其の餘情とはなけれども、心詞とがなくていひくだして、歌合の歌とみえたり。(俊成判)

來むとてもすぐるならひは中々にたのめぬ夜半の情なりけり(千五百番歌合、卷第十八、季能作、千三百廿六番、左、勝)

させるくせもなくよろしくよまれたり。(中略)歌合のうたすがたにて侍れば勝と可し申。(顯昭判)

後の世をたのむ頼みも有りなまし契りかはらぬわが身なりせば(千五百番歌合、卷第十八、具親作、千三百卅四番、左、負)

いとあはれに侍り。ただし、上にたのむたのみなど侍るに、下句にちぎりと侍らん、三つになりてかしがましくや聞え侍らん。歌合にはよろづを忘れて詠みすまされ侍るべき歟。(顯昭判)

「とが」とか「くせ」とかいつたものがなく、また、うるさいと感じられるところがなく、のびやかにいひ下した

歌が、歌合ではよいとされたのである。かういふ形で洗練された歌の中にこそ、眞の「ゆたかさ」や眞の「やさしさ」は生れる筈であらう。さうすると、歌における「優」は、平安時代をつらぬく「雅」のやさしさが、かういふ風にのびやかに歌ひくだされるしらべの中に、ゆたかなひろがりとなつて形象化される美にほかならなかつた、とでもいつたらよいであらうか。

判詞の批評において、「歌合の歌」といふ意識が強くはたらいてゐたと見るべき部分だけを特に取り出して、さういふ場合に、判者達の考へてゐた事を整理して見ると、およそ以上のやうなところに落ちつくらしい。もとより、ここに取り上げた資料の存在してゐる時代だけについて見ても、ここには相當に長い期間が含まれてゐるにかかはらず、それを一しよにして整理してゐるし、それぞれの歌人達の世界も、多様であるにかかはらず、やはり、さういふ歌人達個々の特質の問題はほとんど抜きにし整理してゐるのであるが、しかし、「歌合の歌」のあるべき姿が基本的にはどう考へられてゐたかといふ事は、ほぼあきらかにされる。そして、以上に指摘して見たところを綜合して考へられる、歌合の歌のあるべき輪郭は、『詠歌一體』の「歌も折によりてよむべき様あるべき事」といふ條にいつてゐるところにほとんと近いものとならざるを得ない事が知られる。端的にいへば、歌合の歌は、その時代の歌の典型的完全性が目指されてゐた、といふ事にほかならない。だから、歌合の歌は、個人のものではなくして、時代のものでなければならなかつたのである。一個の作者といふ閉ぢられた世界だけでつぶやいてゐるべきものではなくして、傳統の流れの上にのつてゐる時代の歌人達といふ開かれた世界の共感を克ち得るものでなければならなかつたのである。さうして見れば、中世の勅撰集において、歌合の歌が重要な位置を與へられてゐた事も當然の、根深い根據があつた事になる。そして、その事は、また、歌合において「あはせがら」にかかはつてゐた批評のあり方の問題にも直結してゐた事實にほかならなかつたわけである。